

大 博物館



津山郷土博物館

だより



▲鞍懸寅二郎顕彰碑



▲鞍懸寅二郎肖像写真

くらかけとらじろう
 鞍懸寅二郎は幕末・維新期に活躍した津山藩士であり、勤王家として知られる。字は山君、号は秋汀、後に吉寅と称す。元は赤穂・森藩士で勘定奉行に抜擢されるものの、保守派によって左遷・追放され、江戸に出て塩谷宕陰しおのやとういんに師事、儒学研鑽に努めた。その後、津山藩士河井達左衛門の紹介で香々美大庄屋の中島氏の世話になりつつ、その私塾「休嫌学舎きゅうけんがくしや」で近隣子弟の教育に当たる。文久2年(1862)津山藩に儒者として召し抱えられ、国事周旋に当たる中で広く他藩の志士とも接した。明治元年(1868)以降は大目付・権大参事など藩の要職を歴任、民部省

出仕をも命ぜられるが、同4年8月12日夜に何者かの銃撃を受け、38歳でこの世を去った。

彼の事績顕彰はすぐに始められた。まず、その月のうちに太政官から祭祀料として金70両が下賜されている。同31年(1898)に従四位が贈られ、昭和17年(1942)には津山城跡に顕彰碑が建てられ、建碑経過の報告書と合わせて彼の略伝(坂田義一著)が出版された。顕彰碑の題額は旧藩主の子孫松平康春、撰文は旧藩士族出身で総理大臣を務めた平沼騏一郎、書は建碑会長の淀川正充による。

はじめに

平成9年度、本市では津山藩士鞍懸寅二郎の書簡12通を購入した。通読のうえ整理してみたところ、元治～慶応年間(1864～68)に丸尾玄意(元意とも、代々津山藩御抱えの医師)に宛てて書かれた私的なものと判明した(目録参照)。彼の書簡は『鞍懸吉寅先生略伝』に多く収録されるほか、『津山温知会誌』に建白・上言書が収められている。前者には上記の丸尾氏宛書簡のうちの1通(③)が紹介されているが、その他は新発見の資料である。これらの書簡の年代が特定できたのは、自己安否とからめて当時の世相が細かく記されていたからであり、それに対する彼の判断や感想なども述べられていて興味深い。ここでは書簡の一部を紹介しつつ、この時期の彼の行動や心境について考えてみたい。

1. 小豆島事件

元治元年(1864)8月25日、小豆島沖に停泊中のイギリス船上で銃が暴発して津山藩領蒲生村の幾太郎という青年が亡くなる事件が発生した。鞍懸はこの事件の処理を命ぜられ、イギリスから賠償金として洋銀二百枚を獲得するという成果を挙げた。彼はまず小豆島で調査を行い、京に10日ほど滞在してから江戸に向かった。江戸到着から約1カ月後に書かれたのが①の書簡である。この中で事件について次のように触れられている。

この事件は「皇国二関係スル大事件」であるのに認識不足の人もあり、自分にこの大任が輕易に命ぜられたのは憂うべきことだが、自分の心意気を少し柔らかに言うとおりのこと。

尽しおせにや 死んでもやまぬ
ぬしが知ろうが 知るまいが

ちょうど同じ時期、長州出兵問題が緊迫した局面を迎えていたが、出兵反対を唱える鞍懸をこの問題から遠ざけるために小豆島事件の処理を担当させたと考えられている。そのような藩上層部の意図はともかく、彼としては国家の名誉がかかった重大事件だという認識を持っていた。実際のところ、イギリス側は当初から償金を支払うつもりであり、幕府の消極的姿勢が解決を長引かせた模様であるが、いずれにしても最後の都都逸

に見られるような彼の固い決意が交渉を進展させたと言えよう。

2. 長州出兵問題

先に述べたとおり、鞍懸は出兵には一貫して反対であった。長州戦争について触れているのは、②③⑥⑨⑩であるが、中でも第一次戦争終結直後に書かれた③に、彼の考えが端的に述べられている。

まず津山藩の部隊が皆無事に引き上げたこと、そして事実上戦端を開くに至らなかったのは喜ばしい。開戦して両軍に被害が出て、しかも怨恨を抱くことになれば「夷狄」を利するようなもの。同士討ちを免れたならば、いつか皇国の「御威稜」(威光)によって攘夷実現の日も来よう。

また⑩には戦後処理問題が触れられている。

長州側は攻め取った石見などを返納するとの存念、さすがと感心するが、幕府の姦吏はこれに乗じて十萬石削減を企てているとのこと、浅はか千万なことである。

攘夷を念願とする彼にとって長州戦争は「同士討ち」以外の何物でもなく、どうしても避けたい事態であった。無論、⑩にも見られるように長州側にかなり肩入れしてはいるが、国内の怨恨・反目を解消し、国を挙げて攘夷を決行することが彼の目指すところであったようである。

3. 島田母子の顕彰

文久元年(1861)4月、院庄村の島田なか・浅野母子が藩の役人宛の遺書を残して自害した。盗みを犯して入牢となった夫(父)馬之丞の罪をかぶり、彼の釈放を願って犠牲となったのである。鞍懸はこの事件に大層感銘を受けたらしく、母子の行いを頻りに顕彰している。まず元治元年には、その遺書の模写に解説を付して出版、一万数千枚も作成して配ったとのこと、①には「近日中に出来るであろうから、一枚差し上げよう」と記されている。慶応3年(1867)7月には藩によって碑が建てられることとなり、彼は建碑の取扱方を命ぜられ、撰文も担当した。そもそも私費を以てしても碑を建てようとして、香々美大庄屋の中島氏(津山藩召し抱え以前から世話になっていた)などに協力を依頼していたと

いう。母子顕彰詩文集「めいかくよん鳴鶴余音」の藩費による出版(明治2年[1869])も、自ら編集に当たった鞍懸の熱心な運動のたまものと思われる。彼が島田母子の顕彰に、これ程までの情熱を傾けたのは何故であろうか。元治元年出版の遺書の解説では、当時の清国が欧米列強の鼻息を伺うような態度をとるに至った原因として、士大夫が恥を知らず、事を安穩に運ぶことに汲々としていたという意味のことを述べている。また「ちやうもんのかいしん鳴鶴余音」の序文では、母子の行いは士大夫にとっての「頂門の一針」(警告・戒め)であると評価していることから、日本の「士大夫」たる武士一般に改めて忠義心を喚起し、日本が清国の轍を踏まぬようにすることが彼の主眼であったのだろう。

4. 津山城下の世情と彼の立場

⑪では、この月に津山城下おいまわしの追廻河原で催された芝居興行や坪井町・元魚町での博奕について触れ、いずれも藩に運上が納められ、共に繁盛しており、いずれ「天下二またナキ富国強兵の御国」になるだろうと述べている。芝居については「運上付の芝居と申シテ近国大笑」、博奕に関しては「和漢古今未曾有之御名法」とあるだけだが、津山藩召し抱えに際して万人講(富くじ)の弊害を指摘し、人材こそが第一の国産であると主張した彼が、本心から「名法」として是認していたとは考えられない。これより先、⑩では兵庫開港に触れ、「津山にも高瀬舟に乗って夷人が来るだろう。その時には儒者商売などやめて料理屋でも始め、彼らを待ち受けたい。あなた(丸尾氏)よりは私の方が開けている」などと述べているが、

ここにも多分に自嘲的な意味合いが感じられる。当時の鞍懸は藩政中枢から疎外されていたと考えられており、自身の不遇をかこつ心情が思わず吐露されたと思えばよいのだろうか。⑪の書簡を認めた直後の7月朔日、彼は国産方御用懸すけり介・運上奉行受持に任せられる。この役職をどのように務めたか気になるところだが、詳細は不明である。

おわりに

以上、元治～慶応年間の鞍懸の書簡から、当時の彼について考えてみた訳であるが、1～4の全てに大きく作用していたと思われる彼の尊王攘夷思想について最後に検討してみたい。

藩主松平慶倫に長州出兵を諫めた意見書(元治元年8月18日付)において、彼はこの事態を「きざし皇国尽滅之兆」かつ「せきざし徳川家存亡之関処」ととらえ、このような危機にあつて、津山藩は幕府に代わり朝廷に奉公すべき家柄であり、また長州藩とは縁続きで前年に摂津の警備区域を譲り受けた際に受けた信義に報いるためにも、長州のために弁訴・周旋すべきであるとし、自分に数十日の暇を賜ればこれに従事して、国内の鬭争を調停し同胞が一致団結して「せきざし醜夷之姦計」を挫くのが終生の願いであると述べる。権威の失墜しつつある幕府と、朝敵の汚名を受けた長州とを仲介して対立を解消し、天皇を中心に国内が結束することが攘夷達成の鍵であるというのが彼の信念であり、不遇な立場に置かれながらも、この時期の彼は、その時々遭遇する事件に対処する過程で地道にその信念の表明に努めたと言えよう。

(小島 徹)

鞍懸寅二郎書簡目録

番号	署名[発信地]→宛名[受信地]	年月日
①	寅二郎[江戸]→(丸尾)玄意[津山]	(元治元)11/16
②	寅二郎[江戸]→丸尾賢契[津山]	(慶応元)正/24
③	寅二郎[江戸]→(丸尾)玄意・(菅沼)亀五郎[津山]	(慶応元)2/16
④	鞍懸 <small>すけ</small> 寅二郎 →丸尾玄意	(慶応元?)閏5/28
⑤	寅 →(丸尾)元意[江戸]	(慶応2?)4/10
⑥	寅 [江戸]→(菅沼)亀五郎・代官・(丸尾)玄意	(慶応2)7/19
⑦	寅 →菅沼・実・丸(尾)	記載なし ※6の別紙か。
⑧	寅 [江戸]→三君足下	(慶応2)10/2
⑨	寅二郎[津山]→(今泉)鐵之進[江戸]	(慶応3)2/24
⑩	寅二郎[津山]→(丸尾)玄意[江戸]	(慶応3)6/10
⑪	寅二郎[津山]→(内山)精一・(丸尾)元意[江戸]	(慶応3)6/24
⑫	鞍懸寅二郎 →丸尾漸造	(年未詳)12/4

Information

博物館からのお知らせ

平成12年度企画展

くろがね
黒鉄の文化

わざ ころ
— 技と心 —



●平成12年9月23日(土)～10月9日(月)

津山に所在する名刀約30振を展示します。

平成12年度特別展

国分寺—天平時代の国家と仏教—

●平成12年10月14日(土)～11月12日(日)

国分寺とは741年(天平13)聖武天皇の発願により全国に建てられた官立の寺院です。当時は疫病の流行や藤原広嗣の乱などで政治が混乱していたといわれています。どうしてそんな時に巨額の国費をつかってまで国分寺を造る必要があったのでしょうか。展示会では国分寺創建をめぐる様々な問題を考えてみたいと思います。

第1部/美作国分寺、第2部/山陽道の国分寺(播磨・備前・備中・備後・安芸)、第3部/律令国家と国分寺

記念講演会

- 日 時/10月21日(土) 午後1時30分～午後3時30分
- 講 師/八重樫直比古 (ナリガム)清心女子大学文学部教授
- 演 題/国分寺の建立と金光明最勝王經

「第47回文化財めぐり—港町下津井を歩く—」を実施しました!

●平成12年5月14日(日) 倉敷市 参加者29人

今回は瀬戸内の港町下津井を尋ねました。下津井は古くから瀬戸内海の大要港として、また讃岐への渡海港として栄えた町です。午前9時35分JR児島駅に集まった一行は、旧下津井電鉄の軌道を通りながら、田之浦地藏石仏、田土浦坐神社、萩野美術館、むかし下津井回船問屋、下津井城跡へと歩きました。途中、田土浦神社の所在がわからず、狭い路地を通ってあちこちしましたが、おかげで港町の風情にふれることができました。昼食は下津井城跡。残念ながら樹木にさえぎられて頂上から瀬戸内海を眺望することはできませんでした。午後は祇園神社を経て、午後2時30分頃往復約10kmの行程を無事児島駅に帰着することができました。心配された天候も正午前後に小雨にあっただけで、なんとかもちました。早朝の雨のせいかもしれないよりやや少ない参加者でしたが、港町の歴史的町並みを満喫した一日でした。



江戸一目図屏風を オランダに出品しました!

●平成12年6月16日～9月17日

去る5月16日館蔵の江戸一目図屏風を文化庁に貸出しました。これはオランダ・ライデン国立民族学博物館で開催される、文化庁他主催海外展「日本とオランダの出会い—日蘭修好400周年記念—」に出品するためです。会期は6月16日から9月17日まで。津山市とライデン市とは、津山出身の洋学者津田真道が幕末に同市のライデン大学に留学した縁で、現在両市の友好親善が進められています。今回の出品はそれを一層促進するものと期待されます。

江戸一目図屏風は文化6年(1809)津山松平藩の御抱え絵師楸形恵齋が首都江戸の全景を描いた鳥瞰図です。6曲1隻、紙本着色、縦176cm、横353cm。江戸城を中心に、諸大名の藩邸や社寺・民家などが詳細に描かれた肉筆画として、全国的に著名なものです。館外出品の機会も多く、本館での展示がなかなかできませんが、他の博物館との交流も大事な仕事です。どうかあたたかい目で見守っていただくようお願いいたします。



軒丸瓦 美作国分寺跡出土 津山市教育委員会蔵

博物館入館案内

- 開館時間: 午前9:00～午後5:00
- 休館日: 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料: 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一般 210円(160円)
※()は30人以上の団体

博物館だより No.27 平成12年7月1日発行

編集・発行: 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ㊟(0868)23-9874
印刷: (株)廣陽本社

●は津山松平藩の検印で剣犬といい、現在津山市の市章となっている。